

## *The Pardoner's Tale* における Irony

—“Bigiled is the giler”—

海 老 久 人

裕福なぶどう酒商人の子として生まれた Chaucer は、既に 12 歳の頃に Edward III の息子 Lionel 伯の妃 Ulster 夫人 Elizabeth の小姓として、宮廷人の仲間入りをして、以後 1400 年に没するまで宮廷との関係は続くのである。このような彼の公的生活の経歴からすれば、文人としてよりは、王室宮内官 (valectus)、或いは、外交官としての職務が主たるものであった。しかし、彼は 1370 年以降、しばしば外交特使として、当時ルネッサンス文化が絢爛と華を咲かせ、ヨーロッパ文化の中心地であったイタリアやフランスを歴訪し、彼の文学的・知的素養を刺激され、影響を受けた。未だ活字文化が十分には発達していなかった頃だったので、宮廷詩人としての Chaucer は、宮廷の貴頭、貴婦人を眼前に集め、彼の創作した詩や語り物を朗読してやるのが常であった。Chaucer の場合、当時民衆の間に広く流布し、愛され、語り継がれてきた民間伝承の説話や、民衆にとって最も直接的な文化の接触の場である教会で行われる説教が彼の文学の素材であった。彼にとって、独創的な作品を書くということは、そのような一般的に流布していた文学的素材を彼一流の技量で改作、脚色するということを意味している。

このような意味に於いて、*The Canterbury Tales* は、中世の説話、説教をはじめ、ロマンス、ファブリオ、聖者伝などのあらゆる文学的素材の集大成であるといえる。

14 世紀イギリスの津々浦々から、あらゆる階層の人々が、恒例の Can-

terbury 詣に出かけようと Tabard Inn (「陣羽織屋」) に集合した。 *The Canterbury Tales* の世界は、謂わば、現実の中世イギリス社会の縮図ともいえるだろう。このような現実世界の常として、善もしくは理想的なものばかりが存在はしない。むしろ逆に悪がはびこり、大手を振って濶歩するのである。特に、中世イギリス社会の精神的指導者たるべき宗教界の墮落は、各方面からのきびしい批難、攻撃の矢面に立たされていた。例えば当時ひろくヨーロッパ各地に語り継がれ、一部分は Chaucer 自身の手で翻訳されたという *The Romaunt of the Rose* の中で、当時の宗教界の墮落ぶりが次の様に描写されている。

Eke in the same secte ar sett  
 All tho that prechen for to get  
 Worshipes, honour, and richesse.  
 Her hertis arn in gret distresse,  
 That folk lyve not holily.  
 But aboven all, specialy,  
 Sich as prechen [for] veynglorie,  
 And toward God have no memorie,  
 But forth as ypocrites trace,  
 And to her soules deth purchase,  
 And outward shewen holynesse,  
 Not liche to the apostles twelve;  
 Bigiled is the giler than.  
 For prechyng of a cursed man,  
 Though [it] to other may profite,  
 Hymself it avaieth not a myte;  
 For ofte good predicacioun

Cometh of evel entencioun.  
 To hym not vailith his preching,  
 All helpe he other with his teching;  
 For where they good ensaumple take,  
 There is he with veynglorie shake.

教会の説教家達は、外面では聖者ぶっているが、実際には、彼等は邪悪で、人を欺いて金品を巻き上げることを生業にしているのである。The *Canterbury Tales* においては、Friar, Summoner, そして Pardoner が当時の宗教界の墮落を代表する人物として描かれる。しかし、Chaucer は決して直接、彼等の悪事を暴露して攻撃したりはしない。彼は、この作品を中世イギリス社会の実体に関するドキュメントとして我々に提供しているのではない。宮廷詩人としての Chaucer は、The *Canterbury Tales* の中に彼の分身ともいべき巡礼者 Chaucer を設定することにより、この世界を虚構の世界として構築し、そして彼自身は、自分の本来の意図を巧みに隠すのである。すなわち、この巡礼者 Chaucer を参加させることにより、Chaucer は“Irony”という武器を考案する。この武器を使って Chaucer は、当時の宗教界の墮落ぶりをナイーブに攻撃するのである。神聖な衣をまとった偽善家で、詐欺師は必らずや自分が射た矢が己れに向ってくることを思い知らねばならない。The *Romaunt of the Rose* 5759 行で、“Bigiled is the giler than”（「欺くものが欺かれる」）という逆説的な phrase の中に彼等の皮肉な運命が表現されている。以下、この小論では、“Bigiled is the giler”——或いは、T. S. R. Boase が彼の著 *Death in the Middle Ages* の中で使っている表現を借りれば“The Hunters, Hunted”<sup>9)</sup>——に表現される皮肉な運命が、どのようにして The *Canterbury Tales* の Pardoner の上にふりかかってゆくのが論じられるだろう。

## I Pardoners とその歴史的実体

四月 (Aprille)——イギリス国民にとって、それは長い暗黒と陰湿の季節の終りを告げ、いよいよ全ての生物が、眩いばかりの陽光を浴びて生命を謳歌する季節を意味している。長い、暗黒の、そして過酷な冬の恐ろしさは、今ようやく終わったのである。人々が長い間渴望し、待ち焦がれていた万物生成の春が来たのである。彼等は春の到来と共に、今まで内に閉じ込められていた身も心も外界へと開放させるのである。春風 (Zephirus) の陽気に誘われて、イギリス国民が自分たちの守護神 St. Thomas Becket を祀る Canterbury へ参詣するのは年中行事の一つであった。この参詣に連なるものは老若男女、貴賤を問わず、あらゆる階層の人々から構成されていた。The Canterbury Tales の General Prologue に描写されるもの全て、そこに登場する人物群は全て十三、四世紀イギリス社会の縮図であった。偶然なことから Tabard Inn に落ち合った 29 人の巡礼者は皆、Chaucer の同時代人であり、イギリスのどの地にも見受けられる人物である。当面の問題の人物である Pardoner も又、中世イギリス国民の親しい隣人であった。ここで、Chaucer の同時代人としての Pardoner の実体を一瞥しておかなくてはならない。

中世における Pardoners の仕事は、General Prologue に詳述されているように、二つあったようである。その一つは、Pardoner という名の由来である免償符 (pardon<sup>3</sup> or indulgences) を売り歩くことだった。彼等の発生時の職務は、教会法によってきわめて狭い範囲に限定されていた。彼等は、教会の権限の一部を委任され、信者に免償符を伝達する messenger にすぎなかった。しかも、無差別に誰にでも、この免償符が伝達されるわけではない。すなわち、「自罪を完全に痛悔し [contrite]、再び犯さないとの固い決意をもって、それを償うべき善業にはげみ、恩恵を受ける状態にあり、かつ告解 [confession] の秘跡により罪の赦が与えられ、それ

が信仰生活において有益なものであることを信ずる者において、はじめて免償にあずかり得るのであるしか。」<sup>4</sup>しながら、このような厳正な条件も次第に無視され、*pardoners* は教会からの委任状を悪用し始めた。彼等は、この免償符のセールスマンとして、ヨーロッパの各町村をめぐり、罪深い人間をこの免償符で贖罪してやれるという宣伝文句をふれまわっていた。やがて、彼等は神聖な義務である魂の救済には無関心で、免償符を餌に人々から金品を巻き上げることによってうつつをぬかすのである。

*pardoners* のこのような貪欲をさらに刺激したのは、免償符以外に、聖遺物 (*relics*)<sup>5</sup> であった。中世に異常なまでに昂揚した聖遺物崇敬を背景に、彼等は聖遺物を偽造し、それを売買して私腹を肥やしていったのである。J. A. MacCulloch は、中世の人々の精神作用を特徴づけているものは、「好奇心」(*curiosity*) と「軽信性」(*credulity*) とであると指摘している。<sup>6</sup> 聖遺物にまつわる数々の神秘性、すなわち、その伝説的奇跡や超自然的功德、<sup>7</sup> が中世の人々の好奇心を大いに刺激し、熱狂的な崇拜へ駆り立てたことはもっともなことである。中世の人々にとって、この聖遺物は、全ての精神的、肉体的「病い」の万能の特効薬だったわけである。それ故、再三再四にわたる教会の警告にもかかわらず、民衆は聖遺物を手に入れるために自分の財産を惜しまなかったし、*pardoners* は易々と、偽造物をたずさえ、売りさばいてゆくことが出来たのである。

ホイジンガが、その著『中世の秋』の中で指摘しているように、中世の人々の日常生活につきまとう精神的緊張の度合は、現代人が想像する以上のものであったらしい。<sup>8</sup> 彼等の生活をとりまく一切の事象が過酷なまでの「対照」をなして、彼等の上にのしかかるのである。例えば、それは困窮と富、病気と健康、冬の酷寒と春の暖い陽光等等であるが、<sup>9</sup> このような過酷な生活条件のうちで、とりわけ恐れられたのは「疫病」であった。十四世紀の「黒死病」の流行の際、実に全ヨーロッパの人々の4分の1にあたる2千5百万人もの死者が出たらしい。<sup>10</sup> 当時の人々は、このような恐ろし

く破壊的疫病の蔓延の背後には神の力が働き、人間の罪に対して罰を下されたのだと素朴に信じた。この疫病によって、彼等の心のうちに深く、この世の終末と己れの罪深さへの恐怖の念が植えつけられた。このような恐怖から開放され、救われることが、彼等の切実な願望であった。そして、その願望を成就させてくれるもっとも手近かなものが免償符と聖遺物とであった。彼等は、この二つのものが肉体上の、そして心の罪をあがなってくれると固く信じていたが故に、決して金品を惜しまなかった。中世の pardoners は、このような民衆の心情に巧みにつけ込み、偽物までも売りつけ、自分たちの貪欲さを満足させていたのである。

やがて、このような彼等の傍若無人の活動は宗教界全体の墮落を引き起こしていった——もっとも、この墮落に拍車をかけたのは pardoners に限ったことではなく、*The Canterbury Tales* に登場する Friar や Summoner も又、それに加担していたのだが——。社会的、精神的指導者たるべき宗教界の墮落は、当然、到る所に不平義憤を引き起こした。Chaucer も又、教会の無節操ぶりにより感情をもたなかった一人である。詩人として Chaucer は、彼と同時代人の pardoners を prototype として、彼等のうちから一人を *The Canterbury Tales* という虚構の世界の中で創造し、この Chaucer's Pardoner を通して、宗教界の墮落の元凶のひとつである pardoners の跋扈を告発しようとするのである。その際、彼は彼一流の告発の術をもっていることに注目しなければならない。Chaucer は決して、直接的、そしてあからさまにそれとわかるような告発、弾劾をしたりはしない。彼は、さながらポーカーフェイスを装って、自分の本当の意図を巧みに隠してしまう。すなわち、“Irony” という武器を用いて告発するのである。

大別して“Irony”には二つの型がある：一つは、“Verbal Irony,” と呼ばれるもの、もう一つは、“Situational Irony” (or “Dramatic Irony”), と呼ばれるものである。<sup>10</sup> 前者の“Verbal Irony”では、話し手 (narrator)

が語る言葉が、彼自身の意図とは別な意味を含む場合に“Irony”が生じる。後者の“Situational Irony”では、或る登場人物の置かれている情況(situation)が知らず知らずのうちに、彼の意図とは別な、もしくは逆の方向へと展開してゆく場合に生じる。The Canterbury Tales において、詩人 Chaucer は、“Irony”の二つの型を巧みに結び合わせて、そこに登場する偽善家たちを裁いてゆく。このような偽善家の一人である Pardoner も又、“Irony”という武器の恰好の攻撃目標になるのである。具体的に、それでは、この“Irony”の二つの型がどのようにして Pardoner という人物に組み込まれているかを、まず General Prologue を、そして次に、The Pardoner's Prologue and Tale を中心にみてゆきたい。

## II Chaucer の二つの声——“Verbal Irony”を中心として

General Prologue において、詩人 Chaucer は、彼の分身ともいうべき巡礼者 Chaucer なる人物を創案する。この巡礼者 Chaucer の役割は、The Canterbury Tales の話し手(narrator)として、我々読者、聴衆に、28人の彼の仲間の巡礼者たちの有様を詳述してくれる。巡礼者の一人として Canterbury 詣に参加した Chaucer は、彼の仲間たちの physical appearance や behaviour を描写してくれるのだが、彼はしきりに自分の力量不足と naïvety とを強調する。それで、彼は、「何しろふつつか者のこととて、大目にみていただきたい」(My wit is short, ye may wel understonde) [I. 746]<sup>12</sup>と自己弁護するのである。実は、この自己弁護は、詩人 Chaucer の本来の意図を巧みにおおひ隠すカモフラージュなのである。詩人としての Chaucer は、無知と naïvete を装う巡礼者 Chaucer を自分の仮面(persona)として利用するのである。なるほど、巡礼者 Chaucer は、無知と naïvete の風を装ってはいるが、なかなか一すじ縄ではゆかぬ人物らしいのである。Canterbury 詣の一行に加わり、そのリーダー役をかって出た Tabard Inn の主人にいわせると、この巡礼者 Chaucer は表

情から察するところ、なかなかいたずらっ気が多い (elvyssh) 人物として描写されている。それ故、読者 (audience) は、巡礼者 Chaucer の何気ない語り口と、その背後の tone に十分気をつけなければならない。

巡礼者 Chaucer が仲間たちを描写する言葉の背後には、絶えず Chaucer の二つの声が響いていて、時には、奇妙にこれらの声が不協和音を奏でることがある。高德の人士である Knight や、清貧に甘んじ、己れの義務に忠実な Parson や Plowman に対する賛辞の tone は、Summoner の商売術のうまさ、Friar の人を説得する話術の巧みさ、そして Pardoner の雄弁術に対する賛辞の tone とは明らかに違う。前の三人に対する賛辞は、Chaucer の掛値なしの、賞賛の気持ちのあらわれであるが、後者の偽善家の一団に献呈される “noble,” “worthy,” そして “vertuous” などの賛辞は、彼等が金もうけと人を欺くことのみ人に一倍すぐれていることへの痛烈な “Irony” を伴っている。当面の問題の人物である “gentil Pardoner” [I, 669] は、巡礼者 Chaucer の描写によれば、「悪知恵にかけては北のベリックから南のワーレのあいだには、この赦罪状売りほどの者は他にみられない」[I, 692-693] くらいだし、金もうけにかけては、「貧しい田舎牧師の二ヶ月分の給金よりもたくさん金を、一日で手に入れるのであった」[I, 703-704]。そして、最後に、皮肉たっぷりに、巡礼者 Chaucer は、「だが実を言うと、洗ってみれば、彼も教会の立派な牧師 (noble ecclesiaste) なのだ」と評するのである [I, 707-708]。

しかしながら、詩人 Chaucer の攻撃のほこ先は単に、Pardoner の実務上のことだけにとどまらず、この偽善家が本質的に神聖な仕事には不適格であることを、さりげなく、我々に暗示してくれる。巡礼者 Chaucer は、この Rouncival 出身の Pardoner の physical appearance を描写して次のように語る：「去勢馬 (geldyng) が牝馬 (mare) ならこんなものかと思われた」[I, 691]。すなわち、この Pardoner は eunuch として特徴づけられている。もちろん、巡礼者 Chaucer が意味する eunuch とは、彼

の女性的外観からくる性的不能者のことである。このような肉体的欠陥を持つ Pardoner が卑わいな歌を歌って、好色漢ぶり、*The Prologue of the Wife of Bath's Tale* の中で、「わしも、すんでのところまで女房を貰うところだった。わしの体を苦しめるものを、そんなに高く買ってたまるもんか。今年も女房なんざ貰わねえことにするんだ」 [I, 166-168] と言うのを聞いて、我々は皮肉な含み笑を禁じ得ないであろう。そして、更にこの eunuch にはもう一つの implication を持っていることに注目しなければならない。R. P. Miller が “Chaucer's Pardoner, The Spiritual Eunuch, And the Pardoner's Tale,” の中で指摘しているように、eunuch という概念を Biblical context の中でとらえる時、Pardoner のもっとも本質的性格を理解出来る。<sup>19</sup>

Eunuch という言葉は聖書の中で二つの意味に使われている。例えば、「申命記」23 章 1 節では、「すべて去勢した男子は主の会衆に加わってはならない」としているし、「イザヤ書」56 章 3-5 節では、「宦官も又言ってはならない。『見よ、私は枯れ木だ』と。主はこういわれる、『わが安息日を守り、わが喜ぶことを選んで、わが契約を守る宦官には、わが家のうちで、むすこにも娘にもまさる記念のしるしと名を与え、絶えることのない、とこしえの名をあたえる』」と記されている。<sup>10</sup> これらの二つの旧約聖書に登場する eunuch とは、明らかに文字通り physical なものを意味している。このように字義通りに解釈される場合、この Pardoner はそういう意味で eunuch であるにもかかわらず、聖職者の一員として公然と教会内に入り込んでいることに対する “Irony” を読み取ることが出来る。一方、新約聖書中「マタイによる福音書」19 章 12 節では、「母の胎内から独身者に生れついているものがあり、また他から独身者にされたものもあり、また天国のために、みずから進んで独身者となったものもある」と記されている様に、eunuch に新しい概念——すなわち、spiritual eunuch を付け加えている。この spiritual eunuch を更に paraphrase すれば、

主の為に悪しき快樂から自らけつ別し、善き業を行うことに専念する人である、と理解出来る。そして、この spiritual eunuch の仕事は教会の中に敬虔な会衆をいや増すことである。

このような理想的な spiritual eunuch の type を *The Canterbury Tales* の中に見つけ出すことが出来る。すなわち、町の教区牧師 Parson がその人である。この Parson は聖職者としての自分の役目を正しく理解している。巡礼者 Chaucer が語るところによれば、「正直な生活を模範として人を天国へ導くことが彼の仕事であった。」[I, 519-520] とあるが、この spiritual eunuch からは、Pardoner は、はるかに縁遠い。詩人 Chaucer が、Pardoner の eunuch 的外観に含めた真意は、好色漢 Pardoner の肉体上の欠陥を皮肉ろうとしたのみならず、この「立派な聖職者」が、実は、善き行いを重ね、主のために敬虔な会衆を増やすことに impotent であることを皮肉ろうとしたのである。このようにして、我々読者、聴衆が巡礼者 Chaucer の何気なく語る言葉の tone に少しでも敏感な耳をもっておれば、この仮面 (*persona*) の背後に響く詩人 Chaucer の ironical tone に気づくのである。以上、*The Canterbury Tales* に於ける“Irony”の一つの機能を“Verbal Irony”を中心にして、詩人 Chaucer と巡礼者 Chaucer の二人の声を比較してみたのである。

やがて、朝の訪れと共に、29人の巡礼者の一団は St. Thomas Becket をまつる Canterbury へと出発する。それと同時に、巡礼者 Chaucer は舞台の前面から巡礼者の一団の中へと退き、まぎれ込んでゆく。そして、或る特別な悪徳や愚行を告発しようとする ironist にとっては、舞台からの退場は別の“Irony”の意図を含んでいる。このような ironist は、一見賢しこそうで、有徳家ぶる人物、すなわち偽善家を一つの情況 (situation) に委ねようとする。そして、こういう情況では偽善家は自分の意識的動機に基いて、自分の目的にふさわしい情況を創り出してゆくのだが、結果的には、自分の意図とは逆に、自らを皮肉ってしまう羽目になる。彼

は実際の事態が彼の推量しているのとは全く違う、或いは、逆に進んでいくことに無知である。そこから生じる“Irony”が、“Situational Irony”と名付けられる。*The Pardoner's Prologue and Tale* では、特に、この情況 (situation) が重要な機能を持っているので、以下、その機能について考察してみたい。

### III *Pardoner* にとっての決定的瞬間

“Situational Irony” を中心として：

*The Canterbury Tales* に収録される tales の大部分は、29 人の巡礼が旅の途中に馬上で語るものであるが、特に語る場所の設定があるわけではない。ところが、ただ *Pardoner* の場合にのみ、特別に、情況設定がなされている。Frederick Tupper が “*The Pardoner's Tavern*” の中で *Tavern Scene* と呼んでいるものがそれである。*Pardoner* は、二つの意図から、意識的に居酒屋という情況を必要としている。一つには、彼が常日頃慣れている教会の説教風景を創り出すことである。Host からおもしろい話をするようにもとめられると、*Pardoner* は、まず、飲み食いすることを提案する。すなわち、「ちょっとごめんこうむって、まず、この居酒屋でちょっと一杯ひっかけて、飯をひと口食べたいんだ」と提案し、更に、他の巡礼者からちょっとした反対意見があった後、彼はなおも、「よろしい承知はしましたが、一杯飲みながらでないことには、ためになる立派な話が考えられねえ」——と主張する。その結果、巡礼者たちは、不承不承であれ、喜んでであれ、彼等の馬の歩みを止めて、居酒屋に休憩するのである。経験豊かな説教家であり、無知な民衆を欺くことに巧みな *Pardoner* は、これから語ろうとする物語の効果が、騒々しい巡礼旅行の雰囲気の中で行なわれると、減じてしまうことをよく知っている。彼は常日頃教会で行ってきたと同じ情況、すなわち、眼前に聴衆を集め、彼等の耳を説教者に集中させるにふさわしい情況を作り出す必要を感じている。

それ故、この Tavern Scene は教会の説教風景に酷似している。第二番目の意図は、彼が語ろうとする物語の主題 (theme)——彼が何度も強調している「テモテへの第一の手紙」6章からとってきた *Radix malorum est Cupiditas* (『金銭を愛することは、すべての悪の根である』) という主題にふさわしい雰囲気を作り出すということである。この主題 (theme) の例話 (example) として三人の若い放蕩者 (tavern-revellers) と老人のお話を物語る。当時、居酒屋は全ての悪徳の棲み家として悪名高かった。例えば、当時の説教集で、その内容については民衆もよく知っていたと思われる *Jacob's Well* では、居酒屋 (the tauerne) は “welle of glotonye” であり、<sup>18)</sup> “the develys schole hous” と呼ばれている。Pardoner は、悪徳の巢である居酒屋と、そこで生じる罪の恐ろしい結末「死」について効果的に物語るために、自ら Tavern Scene を選んだのである。このように選ばれた Tavern Scene という状況の中で、Pardoner が語る物語は、全体として、説教の型をとっている。中世に於ける *ars praedicandi* (art of preaching) によれば、説教の構成は、主題 (theme) と例話 (example or *exemplum*) から成っていた。この、免償符売りであると同時に、説教家でもある Pardoner も又、彼の説教を *Radix malorum est Cupiditas* という主題と、若い三人の放蕩者と老人の例話で構成する。 *The Pardoner's Tale* では、Pardoner はこの例話を今までよくやっていた様に、無知な人々が好む “olde stories” [VI, 435-438] から選んだという。そこで扱われている the hunting-of-death motif は中世の小品物語 (*novella*) や例話集 (*exempla*) で当時の民衆の間に広く流布しよく知られていた。

元来この三人の放蕩者と老人物語は別々の素材であったらしい。<sup>19)</sup> しかし、Pardoner は、今彼の眼前に集まっている巡礼者達に居酒屋が生む数々の罪と「死」に対する恐怖を効果的に植えつけるために、これらの別々の素材から the hunting-of-death motif と *Radix malorum est Cupiditas* という主題に都合のよい個所を選んできたのである。まず、Pardoner は、三

人の若い放蕩者を紹介してから、居酒屋にまつわる数々の悪徳 (Gluttony or Cupiditas) を列挙してゆく。すなわち、泥酔、好色、賭事、そして神を冒瀆するおおげさな誓い等々である。[VI. 472-628] その際、II. 498-501 と II. 512-513 のように、*exclamatio* 或いは、*apostrophatio* と呼ばれている rhetorical technique を使っている。その目的は聴衆を情緒的<sup>20</sup>におおって、その心の中に Gluttony の罪に対する恐しい感情を引き起こすことである。

次に、彼は居酒屋の生み出す数々の悪徳への言及の中でひんぱんに「死」についてふれる。<sup>21</sup> ホイジンガが、先の『中世の秋』の中で指摘しているように、中世は到る所に「死」への慨嘆に満ち満ちていたし、教会はこぞって、執拗に「死」への幻影を民衆の心の中に植えつけようとした。<sup>22</sup> 中世の人々はかたときとして、*memento mori* (死を思へ) の声から耳をふさぐことは出来なかった。彼等をして、それ程「死」を恐れさせたのは、「死」が年齢、地位を問わず地上にある全ての罪深い人間を襲うが故にであった。彼等は常に「死」を罪の結果として観照した。<sup>23</sup> ここに含蓄されている「死」とは、単に『創世記』中に記されている、肉体が塵に返るという physical death を意味するばかりでなく、来世に於ける救済を絶望的にさせる spiritual death を意味する。この spiritual death というのは、たとえば S. M. Jackson によれば「罪と暗闇の状態」、すなわち、

...a state of sin and darkness, in which man is from God, the fountain of life and light (I John i. 5), and consequently destitute of true spiritual life.<sup>24</sup>

ということになる。さらにこの spiritual death は既に現世において準備されているのである。

*The Pardoner's Tale* はこの spiritual death の状態を、「だが確かに、美食家は、その罪に生きているあいだは、死人も同然だ」[VI. 547-548] と

いう逆説的な表現を使って表わしている。すなわち、快楽を享受する人間は、たとえ肉体が生きていても霊的には死んだ状態にいる。そして、この物語に登場する三人の若い放蕩者がこの *spiritual death* を体現している、彼等が、もし謙虚に *memento mori* の警告に耳を傾け、悔悛すれば、永遠の生命 (*eternal life*) に入る約束も許されたであろう。しかしながら、これらの放蕩者は、ごう慢にも、この *memento mori* の警告を無視するのである。

*The Pardoner's Tale* に於ける *memento mori* は三人の口を通して警告されている。まず、Tavern boy が、「旦那、こいつ [死] に会わないように、ご用心、ご用心。『いつこいつにひっかかるかしのれないから、気をつけろ』と、おふくろが、わたしにそう言って教えてくれましたんです」と言う。[VI, 680-683] そして、居酒屋の亭主は、この子供の言葉を補促して、「そんなやつのかかかって恥辱を受けないように気をつけるのが利口というもの」と忠告する。[VI, 690-691] 第三番目に、三人の放蕩者が「死」を hunt しに出かけた途中に出会った、なぞめいた老人である。従来、この老人には様々の解釈が与えられているのだが、「マタイによる福音書」16章28節に記されている「よくよくあなたがたに言っておく、人の子が王国にやってくるまで死を味えないものがここにいる」という passage を手がかりに、この老人の prototype を Wandering Jew に求めることが出来る。すなわち、この Wandering Jew は罪の故に「死」を求めても「死」を得られず、永遠にこの大地をさまよひ、苦悩を味わなければならない。「死」に呪われた人間の苦悩の姿について、*The Canterbury Tales* の Parson も又、St. Gregory とヨハネの言葉を援用して、悪しき人間には死なき死があり、たとえ、死を求めても死の方が逃げてゆく、と語っている。[X, 213-216] Pardoner が語る老人が、呪われた彼の体をひきづって大地をさまよっている様子を聞いて、きっと彼の眼前の聴衆は罪と死の恐ろしさに思いをいたしたに違いない。この老人の肉体それ

自体が *memento mori* を伝えてくれるのである。

しかしながら、ごう慢な三人の放蕩者は、この老人が語る自らの呪われた運命から、罪と死の恐ろしさを思うどころか、彼を死神の手先であると罵倒し、無理やり「死」の棲み家を教えるように強要する。彼等が「死」の棲み家だと教えられたところで見つけたものは金貨 (*floryns fyne of gold*) であった。[VI, 770] この金貨のまばゆい光に欲の目のくらんだこれらの放蕩者は、もはや「死」を hunt することをやめてしまう。何故なら、彼等はこの金貨の中にこそ「死」を見つけたからである——もっとも、彼等自身はそのことに気付いていないのだが。この金貨が三人の放蕩者の食欲を刺激し、結局、お互いに殺し合うという皮肉な結末のうちに「死」を huntするのである。この点で、「死」を hunt に出かけた者が、貪欲のために、逆に「死」によって hunt されるという皮肉な運命が成就するのである。

Pardoner は、以上のように、罪と死の恐怖を効果的に引き起こすように仕組みながら、三人の若い放蕩者の物語と老人の物語を語ったわけである。確かに、この三人の貪欲な若者の恐しくも皮肉な運命や、老人の呪われた運命を聞かされた聴衆は皆心のうちに己れの罪と、その結末の死からなんとか救われたいと願ったにちがいない。そして、この時点までは Pardoner の意図は成功していたわけである。ところが、彼が、「みなさん、わしは、こんな工合に、説教するんです」と語り始めるや、今までの、恐しい罪と死についての説教の tone とはがらりと趣きを変え、商売気をまる出しにし始めるのである。[VI, 815ff] Pardoner の語り口の変化に、彼の仲間の巡礼者は、この名うての貪欲家が、次に何を自分たちに期待してくるかに気付く。巧みに、恐怖の効果を仕組んだこの物語で、巡礼者たちを欺けると思いあがっている Pardoner は、いよいよかねてからの金もうけの仕事にとりかかる。彼は、常日頃やってきたように、巡礼者一人一人の罪を贖ってやれるという宣伝文句を餌に、づた袋から免償符と聖遺物を

とり出し、彼等に売りつけようとする。The Canterbury Tales の中で、ただ、この Pardoner だけが、厚かましくも自分の語る話をねたに商売をやろうとする。彼は、Host が最初に提案した “to talen and to pleye” [I, 772] という約束を無視するのである。この約束事は The Canterbury Tales 全体を制約するもので、そこでは誰一人として、己れの私利私欲のために他人を犠牲にしたりすることは禁じられている。The Canterbury Tales の世界は、いわば、旅のつれづれの退屈をしのぐ慰みと遊びの世界でなければならない。そして遊びにはルールが必要である。そういう約束事を無視しては遊びは遊びたることをまったくやめるのである。ところが Pardoner だけが、この約束事に反して、彼の仲間の巡礼者を欺いて、金品を巻き上げようとする。まず、彼はこの巡礼団の一行の統率者である Host を目の前に招くのである。何故なら、この Host が自分の意図に乗ってきてくれれば、きっと他の巡礼者も後に続いて免償符と聖遺物を買ってくれるだろうと考えていたからである。もちろん、Host は、彼が提案した約束を破るような無礼な奴の手になど軽々しく乗るはずはなく、かえって Pardoner は彼からしっぺ返しをくらってしまうのである。Host は、Pardoner がもっとも触れられてもらいたくない肉体上の欠陥を、無遠慮に衝くのである：「聖エレインのみつけた十字架で誓って言うが、遺宝とか聖品とかを手にとっておかむくらいなら、おまえさんのきんたまを手にとっておがむよ。」[VI, 951-953] かくして、この Host のしっぺ返しによって、Pardoner の “Situational Irony” が成就するのである。Pardoner は、彼の物語の三人の放蕩者が味わったと同様の運命、すなわち、“hunters, hunted,” 或いは、“Bigiled is the giler” という皮肉な運命を受けなければならない。

人を欺くことと、金を巻き上げることでは noble で巧みな Pardoner は、彼の前々上の中で自慢気に語っているように、これまで数々の成功を収めてきた。そして、Cantarbury 詣の巡礼の一行に加わった時も又、彼

は仲間の巡礼者を欺いて金品を巻き上げようと秘かに策を練る。彼は、まず、巡礼の歩みを止めて居酒屋で説教の場を現出させる。このような情況がもつ効果的な雰囲気の中で、*Radix malorum est Cupiditas* の主題と、「死」を素材とした三人の放蕩者と老人の例話から構成された説教を行う。その効果は、てきめん聴衆の心のうちに罪と死への恐しさを引き起こすことに成功している。ここまでは、事は全て、彼の筋書通りに運んでいたわけである。しかし、彼が遊びと慰みのために自分の物語を話さなければならないという約束を無視して、仲間の巡礼者を欺こうとした時、逆に Host からしっぺ返しをくらい、彼は自分の意図から完全に欺かれるのである。自分の弱点をつかれた Pardoner は、今や、怒りのあまり口もきけない。[VL, 957]そして、Pardoner と Host のけんかは、*The Canterbury Tales* の世界に由々しい混乱を引き起こそうとしている。

*The Canterbury Tales* の世界の全能の創造者 Chaucer は、この世界を虚構の世界として創造してはいるが、決して理想郷 (Utopia) としてではない。この虚構の世界は、現実の中世イギリス社会の投映であり、縮図なのである。この世界に集うものたちは、イギリスのあらゆる土地から、あらゆる階層からやってきた巡礼者たちである。現実世界に透徹した眼をもつ宮廷詩人 Chaucer は、この世はうつろいやすく、善ばかりが存在するはずもなく、常に悪も同居していることをよく知っている。それだからといって、彼は悪の存在を無条件に許しはしない。当時の諸々の悪徳の元凶の一つであった pardoners に対して一矢を報いるために、彼は “Irony” という武器を使う。しかし、彼は、*The Canterbury Tales* という移ろいゆくかりそめの世界が、Pardoner と Host のけんかによって、永久に混乱したままで在ることは望まない。この混乱を克服して、もとの秩序と平和とを回復させるため、その任に最もふさわしい仲裁者として、Chaucer は、Knight に登場を要請する。この Knight は、*The Canterbury Tales*

の中で、全ての面で理想を体得している人物なのである。<sup>36</sup> この Knight の仲裁によって、両者の間に和解が成立し、再び平和がよみがえり、29人の巡礼者は、もとの巡礼旅行を続けてゆくのである。

## 注

- 1) G. Chaucer, *The Romaunt of the Rose*, 11. 5745-5678. Chaucer からの原文引用は全て、F. N. Robinson (ed.), *The Works of Geoffrey Chaucer* (London: Oxford University Press, c 1957) によった。
- 2) T. S. R. Boase, *Death in the Middle Ages* (London: Thames and Hudson, 1972), p. 105.
- 3) この訳語は『キリスト教大事典』（東京：教文館，昭和43年）に依った。
- 4) *Ibid.*.
- 5) 『キリスト教大事典』によれば、聖遺物とは、「聖人の遺体、その部分または着衣その他その聖人にゆかりある物」である。
- 6) J. A. MacCulloch, *Medieval Faith and Fable* (London: George G. Harrap & Company Ltd., 1932), p. 6.
- 7) 聖遺物のもつ数々の奇跡や功德として次のような例をあげることができる。  
Not only were the sick healed, the blind given sight, the dead raised, and demons tormented or chased away, but relics cured or kept off poison, had power over storms, thunder, rain or floods, gave victory when carried in battle, or kept enemies at a distance, overcame robbers, and supplied succor of every kind. (*Encyclopaedia of Religion and Ethics* [New York: Charles Scribner's Sons, 1908-1927], Vol. VII).
- 8) ヨハン・ホイジンガ(兼岩正夫, 里見元一郎訳), 『中世の秋』(東京: 創文社, 昭和42年), 3 ff..
- 9) *Ibid.*.
- 10) *Encyclopaedia Britannica*, (London: William Benton, 1964), Vol. 17.
- 11) D. C. Muecke, *The Compass of Irony* (London: Methuen, 1969).
- 12) *General Prologue*, 11. 715-746.
- 13) *The Canterbury Tales* の邦訳は全て『カンタベリ物語』(東京: 筑摩書房, 昭和36年)を使用させていただいた。
- 14) *Prologue to Sir Thopas*, 1. 703. この語の意味はきわめて曖昧で、例えば、F. N. Robinson は “mysterious; elf-like, absent in demeanor, not of this

- world”と注しているし、A. C. Cawley は “elf-like (with reference to Chaucer's air of abstraction)” (Geoffrey Chaucer, *Canterbury Tales* edited by A. C. Cawley [London: Everyman's Library, 1966]) と注している。ここでは、Lumiansky や *N. E. D.* に従って、“tricksy, mischievous”の意味として解釈した。Cf. R. M. Lumiansky, *Of Sundry Folk* (Austin: University of Texas Press, 1955), 84 ff.
- 15) R. P. Miller, “Chaucer's Pardoner, The Spiritual Eunuch, and the *Pardoner's Tale*,” *Speculum*, XXX (1955).
  - 16) 聖書からの引用は全て、日本聖書協会によるものを使用した。
  - 17) Frederick Tupper, “The Pardoner's Tavern,” *JEGP*, XIII (1914).
  - 18) Arthur Brandeis (ed.), *Jacob's Well* (for “E. E. T. S.” Series; London; Kegan Paul, Trench, Trübner & Co., Ltd., 1900), p. 147.
  - 19) Cf. Frederick Tupper, “The Pardoner's Tale,” *Sources and Analogues of Chaucer's Canterbury Tales*, ed. W. F. Bryan and Germaine Dempster (London: Routledge & Kegan Paul Ltd, 1958), pp. 415-438.
  - 20) Chaucer, *The Pardoner's Prologue and Tale*, “Selected Tales from Chaucer” ed. by A. C. Spearing (Cambridge: the University Press, 1695), p. 83.
  - 21) Cf. VI, 1. 533, 1. 548, 1. 580, and 1. 165.
  - 22) ヨハン・ホイジンガ, 前掲書, 198頁。
  - 23) Cf. VI, 1. 533.
  - 24) S. M. Jackson (ed.), *The New Schaff-Herzog Encyclopaedia of Religious Knowledge* 12 vols (New York & London: Funk & Wagnalls Co., 1909).
  - 25) Nelson S. Bushnell, “The Wandering Jew and the Pardoner's Tale,” *SP*, XXVIII (1931).
  - 26) Cf. I, 11. 43-78.